

巖谷大四

ロマンのふるさと

文学のある風景

巖谷大四

ロマンのふるさと

文学のある風景

著者略歴



巖谷大四（いわやだいし）

大正4年12月30日東京生まれ。巖谷小波四男。
昭和15年早稲田大学英文科卒。日本文芸家協会・文芸著作権保護同盟副理事長、近代文学館常務理事、ペンクラブ理事。主著に「物語大正文壇史」「人間 泉鏡花」「本のひとこと」「本に親しむ」「初孫と四十雀」などがある。

ロマンのふるさと

1991年5月15日 初版第1刷発行

著者



巖谷大四©

発行者



大橋一弘

発行所



株式会社博文館新社

〒112 東京都文京区小石川2-14-6

電話 03-3811-4721(代)

ファックス03-3818-1431

振替口座(東京) 9-55050

印刷・製本



凸版印刷株式会社 Printed in Japan

落丁・乱丁本は送料小社負担にてお取り替え致します

(定価はカバーに表示してあります)

ISBN4-89177-928-4 C0095

目次

信州冠着山・観月の愁	井上靖『嬖捨』	6
玉川に母の面影・角館	高井有一『北の河』	10
洞爺丸ダブルーイメージ	水上勉『飢餓海峽』	14
京の雅めぐり会う姉妹	川端康成『古都』	18
紀州女の心根に触れて	有吉佐和子『紀ノ川』	22
湖に聞くアイヌ叙事詩	武田泰淳『森と湖のまつり』	26
茂吉を偲ぶ晩秋の蔵王	北杜夫『楡家の人びと』	30
夢巡る街道の今昔物語	司馬遼太郎『街道をゆく』	34
築地・下町・人間模様	森田誠吾『魚河岸ものがたり』	38
雪国の人となりて	三浦哲郎『忍ぶ川』	42
霧ヶ峰の自然保護記録	新田次郎『霧の子孫たち』	46
老桜をめぐる悲恋物語	宇野千代『薄曇の桜』	50
原始の霧につつまれて	八木義徳『摩周湖』	54
のびやかな青春の飛翔	三島由紀夫『潮騒』	58
胸にしみる戦争文学	梅崎春生『桜島』	62
魂の運命的な触れ合い	田宮虎彦『銀心中』	66

水に揺れる突然の休暇……………	庄野潤三『プールサイド小景』	70
鷗外に魅せられた男……………	松本清張『或る小倉日記』伝	74
小豆島のきらめきに……………	壺井栄『二十四の瞳』	78
心に兆した怒りの沈静……………	大佛次郎『帰郷』	82
大阪ジャンジャン横町……………	開高健『日本三文オペラ』	86
漂泊への思い止まず……………	瀬戸内晴美『いずこより』	90
奇想天外村起こし小説……………	井上ひさし『吉里吉里人』	94
動物文学初の金字塔……………	戸川幸夫『高安犬物語』	98
祇園祭・ベルシヤ絨毯……………	五木寛之『燃える秋』	102
恋ヶ窪のフランス小説……………	大岡昇平『武蔵野夫人』	106
打ち鳴らす敗戦の暁鐘……………	宮本百合子『播州平野』	110
怒り秘め「あの日」凝視……………	井伏鱒二『黒い雨』	114
愛の羅針盤知的ロマン……………	津村節子『海の星座』	118
良平少年生い立ちの記……………	中野重治『梨の花』	122
錯綜する過去と現在……………	安岡章太郎『海辺の光景』	126
鎌倉に燃えた悲恋物語……………	立原正秋『薪能』	130
罪と罰・現代版踏み絵……………	遠藤周作『海と毒薬』	134
陶磁に魅せられた父娘……………	芝木好子『青磁砧』	138

- 麦藁帽の浦安スケッチ……………山本周五郎『青べか物語』 142
 日本美の源流を求めて……………山本健吉『いのちとかたち』 146
 研ぎ澄まされた魂の声……………尾崎一雄『虫のいろいろ』 150
 徹底したニヒリズム……………深沢七郎『笛吹川』 154
 心美しき人間の交流……………吉屋信子『安宅家の人々』 158
 生き抜く少年たちの海……………岡松和夫『志賀島』 162
 洗練された大人の詩……………福永武彦『海市』 166
 忍者？芭蕉ミステリー……………斎藤栄『奥の細道殺人事件』 170
 われ生涯をここに置く……………大原富枝『婉という女』 174
 社会悪に鋭い切り込み……………黒岩重吾『背徳のメス』 178
 胸に迫る鋭い生理感覚……………重兼芳子『やまあいの煙』 182
 久女のひもいろく……………田辺聖子『花衣ぬぐやまつわる…』 186
 銀行マンの仁義なき戦い……………山田智彦『人間関係』 190
 湘南・渚の青春物語……………石原慎太郎『太陽の季節』 194
 窒息する感覚のハイブ……………大江健三郎『万延元年のフットボール』 198
 一途な恋愛道徳革命……………太宰治『斜陽』 202

装丁・本文レイアウト▼巖谷純介
写真▼世界文化フォト みや通信社

ロマンのふるさと ● 巖谷大四

信州冠着山・観月の愁

かむりきやま

姨捨 井上 靖

井上靖は幼いころ「おぼすて山」の伝説を聞かされ、小さい心を悲しみにふくらませたという。その思い出はいつまでも心を離れず、何かの拍子に胸に浮かんだ。そして大人になってから実際に信州の姨捨を訪れて見た。その印象に、母の話、妹の話などをダブらせて描いたのが、好短編「姨捨」（昭三〇）である。

△私が実際に姨捨の土を自分で踏んだのはこの秋のことである。仕事で志賀高原に出掛けて行った帰りにふと姨捨という土地を訪ねて見る気になったのである。信越線の戸倉駅で下車したのは夕方、その晩は戸倉の温泉旅館に泊り、翌日自動車を頼んで、姨捨駅へと向かった。▽

この作品の中に「姨捨山新考」という信濃郷土誌の話が出てくる。その本

の中には史上にあらわれた歌人や俳人の姨捨山観月の作品がほとんど収められていくという。

俳句は「姨捨とは草」とか「水薦刈」とか、いくつかの作品集から抜粋されたもので、芭蕉、蕪村、一茶らの作品が多く収められている。

作者は昭和二十九年の秋に、はじめてこの地を踏んでいる。

△自動車は戸倉の町を出ると暫く千曲川に沿って下流へ走ったが、途中から小さい丘陵へと登って行った。

「雨が降らんといいですがね」

と、中年の運転手は言ったが、空は一面曇っており、時雨でもやって来そうな薄ら寒い天候であった。▽

それから運転手とのユーモラスな対話がつづく。姨捨山をいま冠着山（かむりきやま）と呼ぶことを聞きながら三十分程で車は姨捨駅に着く。

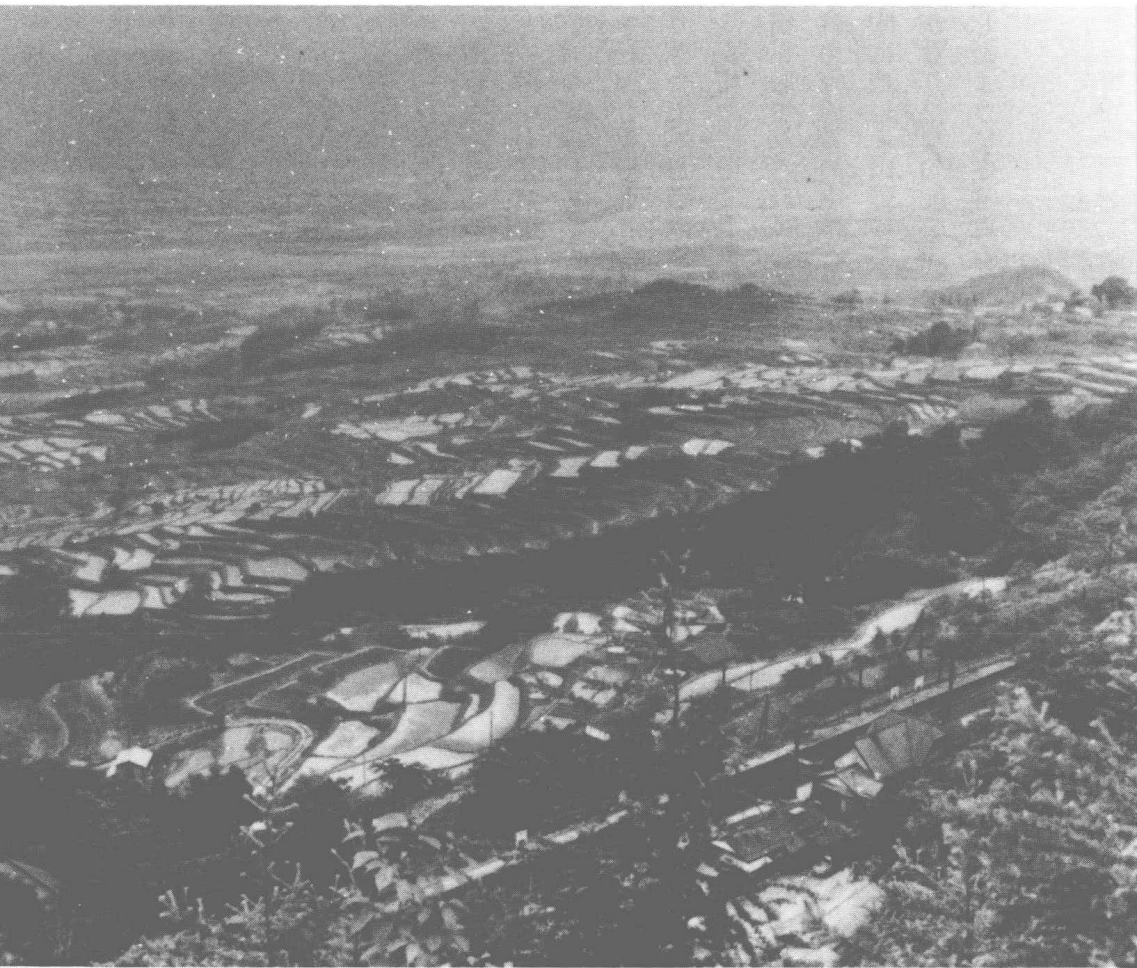
△駅前の広場で下車すると、運転手に案内されて、駅の横手の道を観月の名所として知られている長楽寺の方へ降りて行った。汽車の窓から何回となく眺めた風景の中へ、私は一步一步あゆんで行った。

眼にはいる山野はどこも紅葉していた。

かなり急な勾配を先に立って降りながら、運転手は忘れていたことを思い出したように振り返ると、

いのうえ やすし (1907.5.6~1991.1.29)

明治40年北海道生まれ。京都帝国大学哲学科卒。昭和24年『闘牛』で第22回芥川賞受賞。昭和51年文化勲章受章。主著に『猟銃』、『あすなろ物語』、『氷壁』、『敦煌』、『本覚坊遺文』、『孔子』などがある。▶『姨捨』=新潮文庫刊



*田毎の月、観月の名所・嬉捨山からの眺め

「あれが冠着山ですよ」

と教えてくれた。中腹に駅のある丘陵の向うに重なるようにして、冠着山は山巔を雲に包まれたまま、その山容の一部を現わしていた。▽

私は千曲川に映る冠着山（姨捨山）を川原から眺めたことがあるが、あのような伝説があるとは思えない、まさに冠着山と言った方がふさわしい、おだやかな山である。

△やがて道は自然にそれ自身断崖を形成している巨大な岩石の上に出た。

姨石と呼ばれている石であった。棄てられた老母が石になったものだという。この石もまた不気味だった。が、その石の上に立ってみる善光寺平の眺望は美しかった。平原の中央を千曲川が流れ、黄一色の平野のあちこちに部落がばら撒かれ、千曲川を隔てて真対いの山はこれもまた紅葉で燃えていた。

姨石の横手の急な石段は血のように赤い小さい楓の葉で埋まり、石段を降り切った長楽寺の狭い境内は黄色の銀杏の葉で埋まっていた。▽

姨捨の長楽寺は善光寺平を一望に眺められる高台にあり、そこには観月堂があり、休むことが出来る。夜になるとそこから有名な「田毎の月」を眺めることが出来るのである。

玉川に母の面影・角館

北の河 高井有一

秋田県角館は、小京都とも言われる、昔の面影を残した静かな町である。

町の通りは、ほぼ碁盤の目のように整えられているが、現在の場所に町がつくられはじめたのは、江戸の町が開発されたころとほとんど同じだという。特に町の北のはずれ、もと武家屋敷だった家並の続く表町というあたりは、いまでも昔の面影がよく残っている。そして秋田美人の発生の地と言われるだけに、清楚（せいそ）な美人が多い。

表町を抜けると、昔、町が出来る以前に砦（とりで）が築かれていたという山に突き当たる。その山を「城山」と呼んでいる。その麓（ふもと）にあるのが、県立角館高等学校である。元は中学校で、「北の河」で第五十四回（昭四〇）芥川賞を受けた高井有一は疎開中この中学校に通った。そのころの校

舎は女学校のように桃色に塗られていて、うしろの城山の緑に映えて美しかったそうだが、やがて敗戦直前に、空襲にそなえて黒く塗りつぶされてしまった。それも高井有一たち生徒の手で、授業時間をつぶして泥のような塗料で塗りつぶされたのだという。しかしそれも戦後間もなく失火で焼け、いまはコンクリートの校舎になっている。

角館駅の東に大威徳山というあまり高くない山がある。一面に田んぼがひろがった中にあるその山は、牛が寝そべったような形をしているので臥牛山とも呼ばれる。高井は中学のころよくこの山の裏側に当たる下川原という村落まで勤労奉仕に行かされたという。この大威徳山の山頂からは、良質の玄武岩が採れるので、麓には昔から石切り場があり、石を切り出していた。高井の父で画家であった田口省吾は、よくその近くに画架を立てて石切り場風景を描いたという。

高井の「北の河」は、この角館の町を取りかこむように流れている玉川のことである。高井の母は気が狂い、この川に身を投げて死んだ。「北の河」はそのときの思いをつづった、胸を打つ秀作である。

△母が身を投じた河は町を貫いて流れる。進むに従って徐々に河幅を増し、町を過ぎて五里余の地点で他の一つの河と合し、新たな流れとなって海へ下る。遺骸の上ったのは、その二つの河の合しようとする中洲で、其処は兩岸

たかい ゆういち (1932.4.27～)

昭和7年東京生まれ。早稲田大学英文学科卒。
昭和40年「北の河」で第54回芥川賞受賞。日本文芸家協会理事。主な作品に「谷間の道」「夜明けの土地」「夢の碑」「この国の空」などがある。

▶ 「北の河」=文春文庫刊



角館町の武家屋敷

に山が迫って流れは深く、各所に淵を造っている筈であった。雪の落ち始めた夕方、山から下って来た杣夫が、偶然洲に眼をやって母を見附けた。母は足を水に浸し、顔は洲の石の間に喰い込んでいたという。杣夫の知らせで近くの部落から何人もの人が出て、遺骸を洲の中央に引揚げ、雨の中を一晚篝火を焚いて夜話をしたそうであった。

河は、町を出外れると左手に見え始める。それは時に緩く彎曲していて、葉が既に概ね落ち切った浅い林の向う側に見え隠れした。右側の田の刈入れは全く終って、残された稲の切株が濡れて黒ずんで見える。稲架からも稲は外されて、組み上げた丸太だけが立っている。或る所では、農夫が畔へ出て何のためか太い杭を打込んでいた。其処までの距離は遠く、大きな木槌を打ち降すと、やや暫くあつて鈍い音が空気を伝わって来た。▽

玉川は八幡平から発しており、一度田沢湖に入り、また流れ出て角館の町に入り、町の西側でもう一つ北から来る桧木内川と合流する。それがやがて雄物川に合して海に出るのだが、高井の母のなきがらは、玉川と桧木内川の合流点の中洲に打ち揚げられたのであった。

洞爺丸ダブブルーイメージ

飢餓海峡 水上 勉

函館は、安政元年（一八五四）和親条約によって、下田とともににはじめて外国へ門を開いた港町である。次いで安政六年には、神奈川（横浜）、長崎とともに貿易港として開港した。外交、貿易のために異人たちがやって来た。洋食屋が出来、写真屋が出来、外国にあこがれる青年たちが集まって来た。歴史の残光に照らされた、海の旅情が息づいている港町である。

函館山をめぐって連絡船が静かに棧橋に近づくのと、この異国風の街の丘の上から、時を知らせる教会堂の鐘の音が船まで聞こえて来ることもある。

だが、この連絡船に、昭和二十九年九月二十六日、海難史上空前の大惨事が起こった。洞爺丸が台風15号によって転覆し、死者千四百四十人も出したのである。また同じ日に、北海道岩内町で大火があり、三千五百戸が焼失し